

【暗唱聖句】「主はわたしの光、わたしの救い。わたしは誰を恐れよう。主はわたしの命の砦。わたしは誰の前におののくことがあろう」詩篇 27:1

【今週のポイント】

【日曜日・癒しという休み】

病気になれば身体に休みが必要になります。休むことによって癒されます。これと同様に、心も休みを必要としています。リラックスしたり、リフレッシュしたりすることで心は癒され、精神的に休むことができます。しかし、この心の休みは、簡単ではないことが少なくありません。たとえば不眠症に悩んでいる方が大勢いますが、身体は休みたいと欲しているのに、不安や心配事で心がいっぱい、休むことができないのです。

マルコ 2 章 1 節 12 節にかけて、中風の男性が癒されるという物語が出てきます。彼の問題は病気以上に心の中にありました。何か罪深い生活をしてきて、それがもとで病気になった、あるいはそのように彼自身が思っていたからです。その罪が赦されない限り、心に平安は戻ってきません。心に平安が戻ってこないかぎり、身体もむしばまれたままなのです。

彼の友人たちは、イエス様のもとに彼を連れて行けば癒して下さるに違いないと信じました。しかし、中風の男性は動くこともできない状態です。そこで彼を板の上に乗せて 4 人がかりでイエス様のもとに運んだのですが、何と大勢の人でいっぱい、イエス様がおられる家の中には 1 歩も入れない状態でした。それで彼らは屋根に上り、屋根の一部を壊して上から男性をイエス様のもとにつり下ろしたのです。人々はあっけにとられたことでしょう。イエス様のお話しも中断してしまいました。しかし、イエス様はこの中風の男性を通して、最も大切な教えである、罪の赦しについて教えられるのです。

【月曜日・根源から癒す】

病気の治療は対処療法ではなく、本来その原因を取り除くことが大切です。そうしなければ、どれだけ治療しても、同じ病気を繰り返してしまうからです。イエス様はこの中風の男性を見て、中風という病気の奥に隠れている、彼の罪の問題を見抜かれました。彼に一番必要だったのは、罪の赦し、罪悪感からの解放でした。もし罪が赦されたなら、この病気にも耐えられたことでしょう。彼は罪を後悔し、赦しを求めています。そこでイエス様は言われました。「子よ、あなたの罪は赦される」(マルコ 2:5) と。しかし、この言葉を聞いて律法学者が数人が驚き、これは神を冒瀆する言葉ではないかと考えます。なぜならば、神以外に罪を赦すことができないと知っていたからです。これではまるで、自分が神だと言っているようなものだと思ったわけです。イエス様は彼らの心の中である不信を見抜かれ、こう言われました。

「中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」(マルコ 2:9、10) と。罪を赦すという宣言は、その罪の結果をご自分がすべて負うということを意味していました。それゆえに、起きて歩けというより、余程大変なことでした。そして、「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」と続けられました。これはこの中風の男性だけでなく、全人類に対しての宣言でした。

【火曜日・逃げ出すこと】

エリヤといえば、旧約最大の預言者の一人とされています。彼は、カルメル山においてバアルに仕える偽預言者と戦って大勝利を収めました。この戦いによって多くの偽預言者たちが殺されました。そして 3 年にわたる干ばつも終わりました。民たちが悔い改めたからです。しかし、これに激怒したのが王の妻イゼベルです。イゼベルは激しく怒り、エリヤの命を狙い始めます。そのことを知ったエリヤは、恐れて直ちに逃げます。あれほどの恐れを知らない激しい戦いを繰り返してきたエリヤが、この大勝利の後に、このように弱くなってしまうのを驚くかもしれません。しかし、人間はスーパーマンではありません。強いときもあれば、弱くなってしまうときもあるのです。エリヤは偽預

言者たちとの戦いの中で、エネルギーを使い果たしてしまったのかもしれませんが。国と指導者上 P129 に、次のように記されています。

「大いなる信仰と輝かしい成功の後によくあり勝ちな、反動的な気持ちがエリヤを襲っていた。彼はカルメル山において始まった改革が、長続きしないのではないかという絶望感に陥った。彼はピスガの峰まで高められたのであったが、今は谷間に落ちていた」

エリヤは、偽預言者たちを駆逐することで、アハブ王は回心し、イスラエルに霊的リバイバルを起こることを望んでいました。ところが、逆に自分の命が狙われることになってしまったのです。神様の使命を果たしたことによって、自分一人が追い込まれていく。これは本当に辛いことです。エリヤはその瞬間、神様が見えなくなっていました。

【水曜日・逃げるのに疲れて】

エリヤは追手から逃れるために荒れ野に入り、更に一日の道のりを歩き続けました。そして疲れ果て、「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません」(列王記上 19:4) と祈るほどでした。期待していた結果(イスラエルの改革)が得られず失望し、自分の力の無さを痛感し、疲れ果ててしまったのでしょう。ただ、死にたい気持ちになるというのはよほどのことです。「人の顔を二度と見たくないほどだった」と、国と指導者上 P129 とも書かれており、うつ症状になっていたのかもしれませんが。クリスチャンだからといって、うつを発症しないわけではありません。このような状態のエリヤに対して、神様はいつものように、「恐れるな」と言って励ますのではなく、ゆっくりと眠らせたあと、御使いを遣わし、「この旅は長く、あなたには耐え難い」(列王記上 19:7) と、ごはんを食べさせるのです。神様は私たちの弱さをよくご存じあり、弱り果てているときはゆっくりと休ませてくださるのです。

【木曜日・休み、そしてさらに】

列王記上 19:8 「エリヤは起きて食べ、飲んだ。その食べ物に力づけられた彼は、四十日四十夜歩き続け、ついに神の山ホレブに着いた」

エリヤはゆっくり眠り、そして食事を食べると力が戻ってきました。そこで再び 40 日 40 夜歩き続け、ホレブの山につきます。そこで主の言葉を聞きます。主は、「エリヤよ、ここで何をしているのか」(列王記上 19:9) で問いかけます。これは、我に返らせる言葉です。そして、こう告げられるのです。

列王記 19:15 「主はエリヤに言われた。「行け、あなたの来た道を引き返し、ダマスコの荒れ野に向かえ。そこに着いたなら、ハザエルに油を注いで彼をアラムの王とせよ。19:16 ニムシの子イエフにも油を注いでイスラエルの王とせよ。またアベル・メホラのシャファトの子エリシャにも油を注ぎ、あなたに代わる預言者とせよ」

新しい王を立てる。これはエリヤが期待していた改革を起こすということを意味しています。また、エリヤが変わって新しい預言者エリシャを立てることで、エリヤの激しい預言者としての使命は終わることを意味していました。神様の働きは一人で行うものではありません。たくさんの神の民がいるのです。私たちは与えられた力により、神様の時に、自分の使命を果たせばそれで良いのです。後のことまで考える必要はないのです。常に結果が求められる社会にあって、神の世界はそれとは異なるのです。エリヤは自分の走りぬくべき道程を走り抜き、役割を終え、永遠の安らぎに入るのです。